

## No.23 訓子府発展を支えた鉄路の歴史を展示（2007年3月号）

ふるさと銀河線が昨年4月に廃線となつてから、早いもので1年が経過しようとしています。

銀河線は、国鉄、JR時代を含め鉄路としては約100年の歴史を誇っていました。その長く、貴重な歴史を物語る資料を、銀河線を運行していた北海道ちほく高原鉄道から町教育委員会が譲り受け、くんねつぶ歴史館の交通・通信部門に常設展示しています。

展示しているのは、53点。訓子府駅、日ノ出駅はじめ各乗降場に設置されていた表示板、レール（1923年、旧ソ連製）や枕木、レール穴あけ機やスパナなどの保線用具などです。表示板は、銀河線として使用された18年間のものですが、風雨にさらされ表面が傷んだものもあり、利用者のさまざまな思い出が刻まれているようです。

また、訓子府駅切符売り窓口を再現し、駅員さんが身に着けていた制服なども展示しています。

展示物を見て訓子府の歴史とともに歩んできた鉄路の歴史をもう一度再認識してみたいかがでしょうか。



No.24 「町内の道路、総延長は322km」(2007年4月号)

町内を走る道路は、道道6路線、町道194路線の合わせて200路線で、総延長は321.9kmです。(町と北海道の道路現況調査18年度版)

この統計の15年前、平成3年6月号の広報「くんねつぶ」に掲載している記事では「七本の道と百六十五本の町道」と記されています。

道路として認定あるいは廃止となるなど、本数、延長が毎年のように変化します。

快適な街づくりに向けた事業の一つが道路整備です。本町の道路について、昭和42年発行の訓子府町史に「明治三十一年の道路統計で、訓子府原野道路二里三十二丁二十三とあるが、この道路は、常呂川南岸道路を北光社で切り開いたもので、本町における道路のはじまりである」と記されているほか、「現在実郷の西十九号から、大谷居武士小学校前を通る路線が、訓子府最初の道路で、当時は幅二間の刈分け道であった」とも書かれています。

何気なく歩いている道も、訓子府発展のため多くの人が開削や整備に携わってきたことを改めて考えていかなければなりませんね。

※令和2年8月1日現在、204路線総延長339.4kmです。

(高規格道路および道道含む)



No.25 地域発展とともに歩む中の沢橋（2007年5月号）

3月18日、寒風吹き、横なぐりの雪がほおに当たる中、新しい「中の沢橋」の渡り初め式が行われました。

昭和62年に福野実践会が発行した「開拓85年のあゆみ」によると、明治42年ごろに訓子府川に初めて架けられた木橋が、中の沢橋の始まり。現在の橋の約30m下流だそうです。その後、何回かの水害に見舞われましたが、昭和35年に永久橋そして今回さらに頑強な橋に生まれ変わりました。

明治36年以後、相内屯田兵関係者の開拓から始まった「中ノ沢」地区（昭和16年福野に地名改正）発展を支えてきた橋です。

写真Ⅱ 訓子府川に架かる初の橋として開拓以来地域を見守ってきた「中の沢橋」





町内で一番高い山は。訓子府町史によると、「町の南端を東西に走る釧北山脈は、置戸陸別との境界にある六百四十二メートルの山が最高峰」と記されています。

網走東部森づくりセンター（※現オホーツク総合振興局東部森林室）によると、センターにある図面などで、この山の名称は「大丸」と表記されています。町共同利用模範牧場の一角で、標高は642・42m、ここは町有林です。

町の中心部から南に見える高い山は、道有林で「尾呂山」（標高605・21m）。町史には「オロムシ川と、津別の木樋川との分水嶺が六百四メートル」と記されています。

写真に広大な牧場の一番高い位置が、町内で最も高い山となつていきます。

No.27 中心街で懐かしい歌と踊り披露（2007年7月号）

「千人踊り」の愛称で昭和55年から同62年までのふるさとまつりに登場していた訓子府音頭が、今年（7月7日のまつり前夜祭、中心街）20年ぶりに登場します。

訓子府町史によると、訓子府音頭は昭和26年の町制施行を記念して作られ（大塚みつる作詞・松田喜一作曲）、舞踊振り付けも完成。町開基90年の昭和61年には編曲され、歌手の金沢明子が歌いレコードに再録したと書かれています。このレコードは町内全戸配布されたことから、持っている方もあるのではないのでしょうか。

懐かしい歌と踊りが、今年のまつりを盛り上げます。

写真Ⅱ 町開基90年の昭和61年に全戸配布された訓子府音頭のレコード





北海道立北見農業試験場(※現地方行政法人北海道立総合研究機構農業研究本部北見農業試験場)が、今年創立100周年を迎えました。

明治40年に道庁立農業試験場北見分場として現在の北見市とん田東町に開設、その後農試の整備拡充計画で、昭和26年から移転問題が浮上しました。

訓子府町史には「北見市、美幌町、訓子府町がそれぞれ候補地をたて、三つどもえの誘致運動が展開されたが、土地条件の最もよい本町に決定」と激しい誘致合戦だったことが記されています。

以来、広大なほ場などを活用し、小麦やタマネギなどの新品種開発、品種改良など北海道農業を支える研究開発を行っています。

写真⇨オホーツク管内はもちろん北海道農業を支える研究開発を行っている北見農業試験場

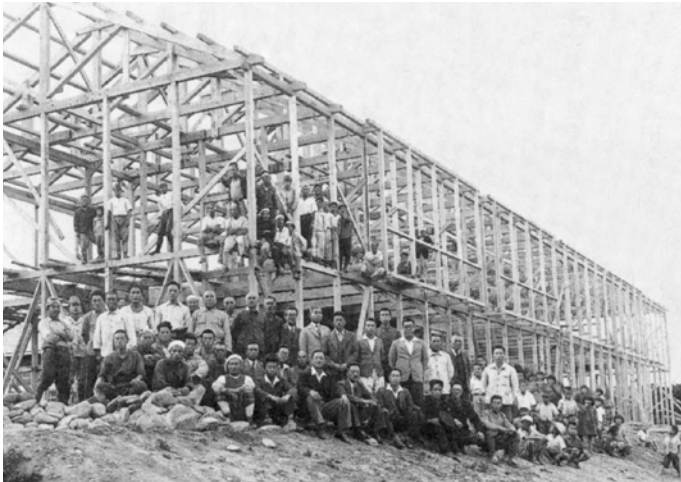
訓子府中学校が、今年(※平成19年)開校60周年の節目を迎えました。記念事業協賛会では、11月25日に記念式典を行う予定です。

昭和22年、教育基本法の公布により新制中学校の設置が義務化され、同年5月1日に訓子府中学校として開校しました。「訓中45年の歩み」によると、「施設は小学校の一部をかり、机や椅子は青年学校からのもち込み…」など、戦後の苦しい状況での開校だったようです。

このため、父母らから独立校舎の建設をめざす運動が広がり、父母の出役の中で昭和24年に独立校舎が完成しました。

写真Ⅱ 父母の協力で校舎建設が始まった

(訓中45年の歩みから)



No.30 訓中開校60周年㊦ 統合校舎建設、地域中学校順次統合（2007年10月号）

父母の出役の中で昭和24年に独立校舎が完成した訓中は、翌25年に北見北斗高校訓子府分校が併置され、グラウンドもしばらくの間、小学校、高校と共有しました。また、町民運動会の会場としても利用されるなど、教育ばかりでなく町民交流の場でもありました。

こうして出発した中等教育の場も改築が必要となると同時に、生徒数が減少している地域中学校を統合する考えも出され、昭和41年に現在地の東町に統合校舎が建設されました。町内4地域の小学校に併置されていた中学校は、同39年の中ノ沢中学校を皮切りに、同48年の美園中学校まで4校が順次統合されました。

写真Ⅱ 訓中統合校舎の工事を紹介する広報「くねっぶ」  
昭和41年8月号







昭和41年に統合校舎が完成しましたが、20年以上経過し校舎の老朽化が進んだことから、平成元年から4年間かけて新校舎が建設されました。それが現在の校舎です。

「未来に向かってたくましく生きる生徒」を教育目標とし、PTAをはじめ地域と共に歩んで60年。この間、各種スポーツクラブや文化活動などで管内、全道に名を高めました。

今年（※平成19年）3月末までの卒業生は、9,101人を数えています。歴史の大きな節目の一つを祝う式典は、11月25日に行われ、未来に向けて新たな飛躍を誓います。

写真Ⅱ 新たな飛躍をめざす訓子府中学校

No.32 レール撤去され、風景様変わり（2007年12月号）

昨年（※平成18年）4月に廃線となったふるさと銀河線のレール・枕木撤去作業が行われました。

列車の走る音が聞かれなくなって1年7か月。踏切もなくなり、レールと枕木だけがひっそりと町の東西に走っていましたが、それも11月末までにはほとんど姿を消しました。

明治44年に訓子府駅が開設されてから休みなく働いてきたレール。町内の区間延長は約11km。レールは、1本25m、重さ約1tになります。この区間に枕木は15,000本以上ありました。

銀河線の歴史は、跡地の活用によっても引き継がれます。

写真Ⅱ 廃線となった銀河線のレールが次々と撤去されていきます





平成元年に穂波地区のボーリングで、温泉が湧き出してから20年が経過します。平成3年にオープンした温泉保養センターは、昨年11月末までに94万人の入浴客があり、平成20年度中には100万人に達しそうです。

町は、地域活性化と地域資源エネルギー活用などを目的に温泉開発を進めました。温泉は、近くの特別養護老人ホーム、ケアハウス、デイサービス事業でも有効活用されています。

また、温泉保養センターには、町外からも多くの入浴客が訪れるなど憩いと交流の場となっています。

写真Ⅱ 「訓子府温泉」の源泉、地熱エネルギー利用施設  
ポンプ室

第29回さむさむまつりが2月3日に公民館前で開かれます。訓子府の冬のイベントとして定着し、来年（※平成21年）は30回の節目を迎えることとなります。

初めての開催は、昭和55年2月17日。当時は決まった名前が付けられておらず、同年3月号の広報「くんねつぶ」では「盛大だった冬の祭典」と見出しが付けられ、雪の滑り台を樂しむ子どもたちの写真が掲載されています。

「やむさむ」の名前は、公募して昭和59年の第5回から使われています。当時、訓小3年の二人が名付け親です。

※名付け親の当時訓小3年生二人は、小林さちさんと、雅楽川久子さんと、まつりの席上、「名付け親証明書」が贈られました。

写真Ⅱ 広報「くんねつぶ」で「冬の祭典」として初開催した様子（右）と「やむさむまつり」と名付けられた5回目の冬のイベントを紹介



No.35 今年も「うらら」にひな人形 来庁者の目を楽ませる（2008年3月号）

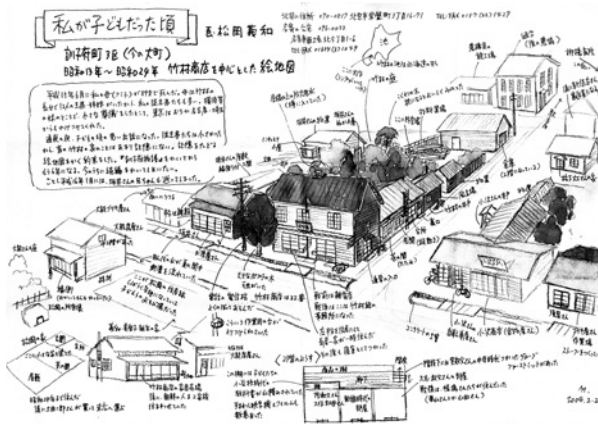
3月3日のひな祭りにちなみ、今年も総合福祉センター「うらら」にひな人形が登場しました。平成14年2月に、町内にお住まいの方から寄贈されました。7段飾りで、今から35年ほど前に購入されたものです。

町では、「子どもたちの健やかな成長を願い」毎年飾っています。

同センターでは、親子の交流を行う事業などを行っており、多くの子どもたちが訪れ、ひな人形を見つめています。また、ひな人形も子どもたちを優しいまなざしで見つめています。

写真Ⅱ 毎年来庁者の目を楽ませるひな人形





写真Ⅱ 当時を知る人には懐かしい昭和初期の大町の絵地図

訓子府町出身の児童文学者、松岡義和さん（北見市在住）から平成16年に寄贈された「訓子府の絵地図」が、くんねっぶ歴史館に展示されています。

「私が子どもだった頃」のタイトルが付けられた絵地図は、昭和13年から昭和24年までの訓子府町3区（※現大町）の風景を松岡さんが手書きしたものです。

雑貨店だった「竹村商店」、金物屋の「小沢商店」など店舗や住宅が描かれているほか、防空壕や井戸なども説明文付きで紹介しています。

町の一部ですが、当時を知る人には懐かしくなる地図でしょう。

No.37 遠くの雪残る山、きれいに見える春（2008年5月号）



町内では、西側に大雪の山々が見えます。春先の晴れた日には、雪がすっかりなくなった中心街から、まだ雪消えぬきれいな山並みを見ることが出来ます。

大雪の山並みは多くの方が知っていると思いますが、東側にも見ることが出来ます。北栄で撮影した上の写真の雪がかぶった山は、地域の方にお聞きすると、「雌阿寒岳」だそうです。美園の牧場から見ることが出来るのは知られていますが、初めて知った方もいました。斜里岳や藻琴山も見ることができるとか。町内の高台などで、たまに四方を見渡すと新たな発見があるかもしれませんね。

写真Ⅱ北栄から東側に見える雌阿寒岳

訓子府高校が今年開校60年の節目を迎えました。

訓高は、昭和23年11月5日に「北海道北見北斗高等学校訓子府分校」として創立しました。訓子府町史によると「勤労青少年に勉学の道を開き、教育の機会を均等とするため」と創立の理由を説明しています。

分校は、夜間定時制（普通科1学級）で、訓子府小学校の一室を使って授業を開始しました。その後、訓子府中学校校舎で授業を行ったほか、専任教員もいないなど苦難の船出だったようですが、昭和36年に念願の独立校舎が完成しました。

写真Ⅱ 昭和36年に完成した訓高の独立校舎

（訓高50年史から）





昭和27年に北見北斗訓子府分校から訓子府高校と名称変更したあと、昭和37年には夜間定時制に昼間定時制1学級が加わったほか、農業者の育成に向けて同41年には昼間季節制普通科が農業科に移行されました。

農業関係教育が充実していく中、同49年4月に全日制普通科に学科転換、入学志願者も年々増えるなど父母や住民から、町立から道立への移管を求める声が起こり、同51年、訓高は道立高校として新たなスタートを切りました。

町立の期間27年間で867人の卒業生を送り出しています。

写真Ⅱ訓子府高校道立移管を掲載した新聞記事など

（訓高50年史から）



昭和51年に道立移管した訓高は、昭和53年度に創立30周年記念式典を挙行し、新たな飛躍をめざしました。

このころから、近隣市町からの入学希望者が増え競争率も高くなったほか、進学率・就職率が向上、部活動も活発になりました。

昭和61年には道内公立高校で唯一、「北海道教育委員会研究指定校」の指定を受け、62年には網走管内教育実践表彰を受賞、平成6年度には現在の校舎などが全面完成しました。

今年（※平成20年）3月末までの卒業生は3,318人で、訓高の着実な発展を支えています。

写真Ⅱ 開校60年を迎え、さらなる飛躍をめざす訓子府高校



No.41 幼稚園30周年㊤ 園章は元・南訓小校長が考案（2008年9月号）

町内旭町の住宅街に子どもたちの歓声が響きます。ここは訓子府幼稚園。昭和53年4月10日に多くの関係者が喜ぶ中に入園式が行われ、今年（※平成20年）で創立30周年の節目を迎えました。

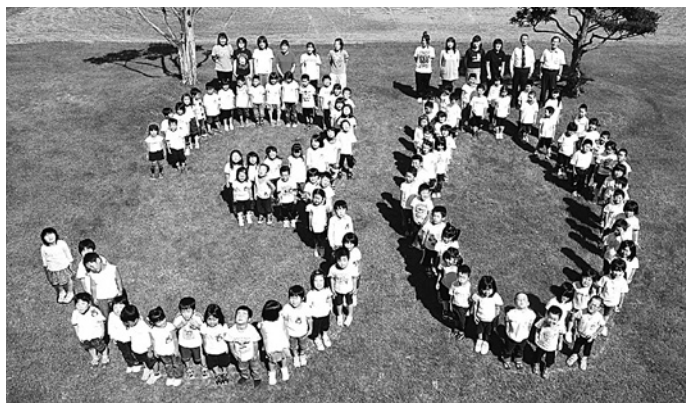
開園して3年後の昭和56年に園章が制定されました。プレールームにあるのを見たことがある方も多いと思います。

元・南訓小校長で初代園長の千葉博さんが考案。六角形は雪の結晶、空間は大空をイメージし、町花のツツジを支えに、園のクラスを表現した4個の大丸、園児を表した7個の小丸。北国の元気な子どもたちが手をつなぎ、伸び伸びと成長することを表現しています。

※幼稚園は現在、認定こども園となっています。

写真Ⅱ町議会が訓子府幼稚園設置を決めたことや、園舎の概要などを紹介する広報「くんねっぷ」昭和52年10月号と園章





「町内に幼稚園を」という地域の強い要請と幼稚園教育を実現することで、幼・小中高の一貫教育の充実をめざし、昭和53年4月に開園した訓子府幼稚園。

町開基100年を迎えた平成8年には、幼年消防クラブが結成されたほか、100年記念事業に園児が参加するなど、毎年、園児が各種行事で活躍。現在、幼稚園では記念誌を作成中です。「正しい社会性を身に付け、心身ともに健康で、情操豊かな明るい子どもの育成に努める」を教育目標とし、今年(※平成20年)3月までの30年間で2, 501人が巣立っています。

写真Ⅱ園児でつくった「30」の人文字



元町の道道沿いに、町教育委員会が設置した「駅逓所跡」の史跡標示板があります。「駅逓」それは、開拓を進める移民などにとって「休泊所」などとして大きな役割を果たしました。

町史によると、訓子府駅逓は明治39年に開設。訓子府を開拓した高知県の北光社農場支配人、前田駒次が取扱人でしたが、「実際の経営者は岩渕周之助（野付牛外1カ村2代目戸長）」だったそうです。

宿泊や、馬を貸して次の駅逓まで送るなどの役目を担い、訓子府や周辺地域の発展に貢献した駅逓も、明治44年の鉄道開通や市街地に旅館が開業するなどして、大正9年に廃止されました。

※史跡標示板は現在新しくなっています。

写真Ⅱ 開拓移民の休泊所「駅逓所」跡

No.44 冬期間入牧の歴史に一つの区切り（2008年12月号）

美園にある町共同利用模範牧場のサイロ6基を、11月中旬にすべて取り壊しました。

昭和44年度に開設した牧場は、同63年度まで冬期間も乳牛などを受け入れていました。その飼料を入れるこのサイロは43年度から45年度の3か年で整備し、約20年間「活躍」したあと、「休眠」していましたが、鉄の需要が高まった今年、町は売却を決めました。

高さ18m、直径6m、容量は230t。牧場に行くと、その大きさにまず目を引かれました。サイロは、大型の機械で1基ずつ取り壊され、冬期間入牧の歴史の一つが姿を消しました。

写真116 基あったサイロが次々壊されていきました



No.45 字名の歴史① 訓子府地域の始まりは2地区（2009年1月号）

訓子府町は現在、30の字名があります。役場に字名の変遷を示した表と大正時代の区域図があります。

町教育委員会OBの橋爪実さんが、町史や自分の調査を基に作り上げ、平成13年町教委発行の「訓子府町の生活と文化」に掲載したものです。この変遷表を見ると、町内の地域は大きく変遷していることが一目で分かります。

まず、明治30年に野付牛村に属する以前の訓子府地域は、道庁時代として西16号線から西18号線までを「旧区画地」、西19号線以西を「新区画地」としていたようです。

写真Ⅱ 大正時代の区域図と字名の変遷を示した表

